年）376―377頁。

[2] 幕末期における遣外使節は、1860年遣米使節のほか、1862年の遣欧使節、1863年の遣仏使節、1866年の遣露使節、1867年の第二次遣仏使節（将軍慶喜の令弟である徳川昭武一行）である。以上の五回は、いずれも日本政府としての江戸幕府が派遣した外交上の使節であるが、外交目的と共に日米欧の国際的文化交流が行われていることがその特色である。大久保利謙編『岩倉使節の研究」（宗孝書房、１９７６年）15－16頁。

[3] 万延元年遣米使節団首脳陣構成について、正使の新見正興（1822－1869）、副使の村垣範正（1813－1880）、副使（監察）の小栗忠順（1827－1868）である。正使の三名は、すべて地方官憲であるが、とりわけ新見と村垣は幕府対外交渉を担う外国奉行を兼職していた。石川栄吉『海を渡った侍たち―万延元年の遣米使節は何を見たか』（読売新聞社、1997年）11－13頁。

[4] 小田基『玉虫左太夫『航米日録』を読む―日本最初の世界一周日記―』（東北大学出版会、2001年、第2版）6―7頁。

[5] Daily Evening Bulletin, Dec.18, 1871.

[6] New York Times, Dec.19, 1871.和訳出典：『外国新聞に見る日本①1852－1873本編』556頁。

[7] 横井勝彦『アジアの海の大英帝国―19世紀海洋支配の構図―』（同文館、1988年）137－144頁。

[8] Daily Evening Bulletin, Dec.19, 1871.

[9] 宮永孝『幕末オランダ留学生の研究』（日本経済評論社、1990年）9－11頁。

[10] New York Times, Jan.17,1872.和訳出典：『外国新聞に見る日本①1852－1873本編』558頁。

[11] *ibid.*

[12] Takii Katsuhiro, *Itō Hirobumi-Japan's First Primer Minister and Father of the Meiji Constitution* (Abingdon: Routledge, 2014), 10-15.

[13] ibid.

[14] 大塚桂『明治国家と岩倉具視』（信山社、2004年）20－27頁。

[15] The Milwaukee Sentinel, Feb.06, 1872.

[16] 宮永孝「アメリカにおける岩倉使節団－岩倉大使の条約改正交渉－」『社会労働研究』38（２）（1992年）、64頁。

[17] "*The Japanese Embassy - Six Young Ladies Sent to America to Finish their Education,*" Daily Evening Bulletin, Jan.16, 1872.

[18] "*To the Ladies of the Japanese Embassy,*" Daily Evening Bulletin, Jan.25, 1872.

[19] New York Times, Feb.20, 1872.和訳出典：『外国新聞に見る日本①1852－1873本編』561頁。